

# 不登校乗り越え自信

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から  
(4)

④

「バカ、が自分のあだ名でし  
た。琉球大学の教室で5月31  
日、那覇市の高校生、新城飛翼  
さん(15)が同級生からいじめら  
れたり、教師から排除されたり  
した小中学校時代の経験を語つ  
た。法文学部の授業「働くこと  
とつながることの社会学Ⅱ」で  
大学生を前に、自身のつらい体  
験を大公開の場で初めて語った。

新城さんが複数の同級生から  
いじめられるようになったのは  
小学1年のとき。給食の牛乳を  
頭から掛けられたり、悪飛はさ  
りた。学校が怖くて毎日下を  
向き、通学路を歩いたという。

同級生たちは冠し舞や掛け算  
の問題を出し、答えられない新  
城さんを「こんなもん分かん  
ん、バカじゃねーか」と、か  
らかった。「バカと一緒にいる  
と、こっちまでバカになる」と  
言われ、仲間外れにされた。

「悔しかったけど、勉強でき  
ないのは本当だし、何やっても  
ダメだし、自分が悪いのかなあ  
って……」

教師がどんな対応をしたかと  
いう学生からの質問に対し「人  
は、先生の見てないところでや  
るんですよ」と答えた。それで  
も友達をつくりたい、という一  
心で教師や親にはいじめられて  
いることを黙っていたという。

「みんなはチーターみたいにな  
って進んでいくけど、自分は  
ゾウみたいに、のっそりそのそ  
ろしか歩けない。勉強が分からな  
いまま進んでいると頭がゴチャ  
ゴチャで、目が曇るようになって  
うな感じだった」

「いじめられていて人助けて」



小中学校時代の体験を語る新城飛翼さん(右)と金城隆一代  
表理事(一西那町・琉球大学)

が「じり」とした体験は「いじ  
められないよう体を大きくし  
た。成果、いじめっ子を遠ざ  
らせた。タンベルなどで体を鍛え  
た。」

■ 中学時代、不登校の中高生ら  
の居場所になっている民間施設

「くくく」(タクル)に通い  
始めた。家庭は困難世帯で高校  
進学には多くの譲歩があり、踏  
めかけた時期もあった。だが支  
援を受けて徐々に自信を付け、  
不登校を乗り越えて今春、高校  
に進学した。「今は毎日が楽し  
い。タクルに励まされている」と  
感謝の言葉を語った。

授業の前後、新城さんは「い  
じめられている人は助けを待っ  
ている。手を差し伸べてあげて  
ほしい」と訴えた。かつての自  
分と同じ境遇の小中学生に向け  
て「学校のいじめごとを命を  
捨てるなら、生きてほしい」と  
メッセージを送った。滑らかな  
はなやかな声とした語り口から  
は、自信がにじみ出ていた。

琉大の野入直樹准教授は「自  
分のしんどい体験はなかなか話  
せない。貴重な話を受け止めて  
ほしい」と学生に呼び掛けた。

■ タクルを運営するNPO法人  
県青少年自立援助センターあ  
らゆいの金城隆一代表理事は  
「ぼくと学校に行っていない  
子を、そのまま社会に放り出す  
わけにはいかなかった」と振り返  
る。人とのつながりや自己肯定  
感を育て、社会に送り出さなけ  
れば将来、生活困窮に陥る恐れ  
がある。島の連帯を断つため、  
中高生や中学生、高校中退者な  
どの支援を続けていく考えだ。

■ 金城さんは「かわいさうどか  
まどういことではない。子ども  
を社会全体で育てていくプロジ  
ェクトにしなければならぬ」と  
と力を込めた。「子どもの貧困」  
取材班・田嶋正樹 一西那町掲載